

幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング

Influences of Parent-child Relations on Modeling of Prosocial Behavior and Aggressive Behavior in Young Children

森下 正康

MORISHITA Masayasu
(和歌山大学教育学部)

庵田 奈甫*

ANDA Naho
(和歌山大学教育学部)

親子関係の特徴が幼児のモデリングにどのような影響を与えるかについて、次のような仮説を設定した。① 受容的な親子関係において向社会的行動のモデリングが生じるだろう。② 拒否的な親子関係や統制的な親子関係において、攻撃行動のモデリングが生じるだろう。仮説を検証するために、幼稚園児 244 名の向社会的行動と攻撃行動の特徴について、父親母親と担任教師に評定を求めた。さらに父親母親に対しては、自分自身の向社会的行動と攻撃行動および養育態度の特徴について評定を求めた。そして養育態度の特徴ごとに向社会的性や攻撃性について親子間の相関係数を算出し、さらに分散分析を行った。

主要な結果は次の通りであった。(1) 女兒に対して父親が受容的な場合、父親と女兒の向社会的性得点は相関が高く、かつ父親自身と女兒の向社会的性得点が共に高かった。したがって、受容的な父子関係のなかで、女兒に向社会的行動の豊かな父親へのモデリングが生じ、高い向社会的性を形成したと考えられる。この結果は仮説①を支持していた。母親の場合はそれとは対照的な結果が示され、拒否的な母子関係のなかで、男女児共に向社会的性の低い母親へのモデリングが生じ、低い向社会的性を形成すると考えられた。(2) 母親の統制がゆるい場合、男児の向社会的性得点は母親の得点と相関が高く、母親へのモデリングが生じている可能性がある。(3) 父親が拒否的な場合、男女児の攻撃得点は父親の攻撃得点と相関が高くかつ攻撃得点も高かった。したがって、拒否的な父子関係のなかで父親へのモデリングが生じ、子どもは高い攻撃性を形成すると考えられる。これは仮説②を支持していた。(4) 父親、母親の統制的態度はその親自身と子どもとの間における攻撃行動の類似性とは関連がなかったが、他方の親と子どもとの類似性に関連していた。

キーワード：モデリング、親子関係、向社会的行動、攻撃行動、幼児期

問題

子どもは自らのパーソナリティ形成においてまわりの人々をモデルとしている。このようなプロセスで生じる学習について、Bandura は社会的学習 (social learning) またはモデリング (modeling) とよび多くの実験的研究を行ってきた (Bandura, 1977)。

子どものモデリングにおいて、子どものまわりにはモデルとなりうる人々がたくさんおり、またそのモデルとなる行動も多様である。どのような人がモデルとして選択されるかについて、同一視 (identification) という文脈のなかで、従来次のような仮説が提案されてきた (森下, 1996)。一つ目は、子どもは自分にとって脅威や不安を与える人へ同一視するという仮説 (防衛的同一視説)。二つ目は子どもは自分の世話をしてくれる人や愛する人、尊敬する人へ同一視すると

いう仮説 (発達の同一視説あるいは依存的同一視説)。三つ目は子どもは権威や権力をもつ人、有能な人へ同一視するという仮説 (役割理論仮説) である。

このような同一視に関する理論や現象を学習理論の枠組みのなかで再構成しモデリングとして扱ったのが Bandura であった。彼は後に社会的学習の認知過程を重視した理論モデルを提出している (Bandura, 1986)。しかし、彼はどのような人のどのような行動がモデルとして選択されるか、特にどのような親子関係のなかでどのようなモデリングが生じているかに関してはあまり関心を示してこなかった。その理由の中に、そのようなテーマを実験的に扱う困難さが含まれていたかも知れない。

筆者は彼の理論モデルをもとに、モデリングにおけるモデルと観察者 (子ども) との関係という要因を入れ、さらに彼の動機づけ過程の位置づけを修正してモ

デリングの認知過程に関する新しい理論モデルを提出した（森下、1996；図1）。本研究では、モデリングにおける子どもとモデル（ここでは父親と母親）との関係の要因とモデル行動の種類に焦点を当てている。

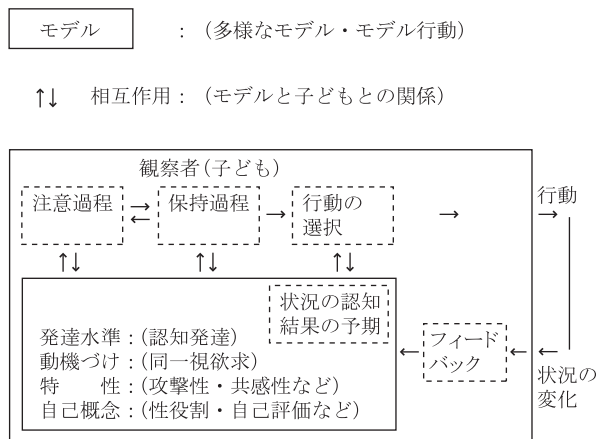


図1 モデリングの理論モデル

すでに小、中学生を対象とした調査的研究において同じようなテーマについて検討してきた（森下、1983、1990）。その結果に基づいて仮説を設定して、幼児を対象とした実験的研究により部分的にその仮説を検証してきた。しかし、実験研究においては要因の操作の難しさ、変数を測定する方法やメジャーの信頼性・妥当性等について限界がある。さらに、実験研究は現実の親子関係のなかで何が生じているかを明らかにできるものではない。したがって、本研究では幼児の親子関係のなかでどのようなモデリングがどのようにして生じているかに焦点を当てたい。ここでは観察という方法ではなく、調査的データの中からその秘密を探ろうとするものである。そこで従来の研究結果が示唆している仮説を検討することを通じて、この問題を明らかにしようとした。

仮説1 受容的な親子関係において子どもに向社会的行動のモデリングが生じるだろう。この仮説は発達の同一視説や依存的同一視説に一致している。受容的あるいは親和的な親子関係のなかで、子どもは親への豊かで強い信頼感や愛着関係を形成するだろう。そのことを媒介としてモデリングが生じると考えられる。このような関係においてはどのような行動であってもモデリングが生じると予想されるが、特に親が望む方向へのモデリングが生じやすいだろう。したがって、そこでは向社会的行動のような一般的に望ましいとされる行動のモデリングが生じやすいと予想される。

仮説2 拒否的な親子関係や統制的な親子関係において攻撃行動のモデリングが生じるだろう。拒否的あるいは統制的な親子関係のなかで、子どもはストレスやフラストレーションを強く体験していると考えられ

る。一般的には望ましくない親子関係のなかでは、そこに生じるストレスやフラストレーションが媒介となって、攻撃行動のような望ましくない行動のモデリングが生じやすいと考えられる。

方法

1. 調査対象

幼稚園の3、4、5歳児の父親と母親および担任教師を対象として質問紙への評定を求めた。得られた296組のデータから記入漏れのあるものや同一人物が評定したと疑われるものなどを除き、すべてのデータのそろった244組（表1）について分析を行った。

図1 分析対象の内訳

歳児	3	4	5	計
男児	41	46	46	133
女児	31	39	41	111

2. 手続き

担任教師に対してはクラスの一人ひとりの子どもについて、向社会的行動と攻撃行動に関する質問紙への評定を求めた。各園児の父親母親に対しては、子どもと自分自身について向社会的行動と攻撃行動に関する質問紙と、養育態度に関する質問紙への評定を求めた。質問紙は封筒に入れて園児を通じて配布し、封筒に入れてもらって回収した。希望者には個人個人の結果をフィードバックすることを約束した。

3. 測定尺度

(1) 園における子どもの向社会的行動と攻撃行動
園での向社会的行動や攻撃行動を測定するために、森下（2001）の作成した16項目を用いた（表2）。

(2) 家庭における子どもの向社会的行動と攻撃行動
家庭での子どもの向社会的行動を測定するために横塚（1988）、森下（1998、2000）、岩立（1995）を参考に12項目を作成した。攻撃行動については森下（2000）の8項目を用いた。（表3）

(3) 父親母親の向社会的行動と攻撃行動
親の向社会的行動を測定するために菊池（1988）、横塚（1989）から10項目を用い、攻撃行動については安立（2001）から10項目を用いた（表4）。

以上の質問紙の各項目に関して、それぞれ4段階評定（3. そうだ、2. ややそうだ、1. ややちがう、0. ちがう）を求めた。

(4) 父親母親の養育態度
鈴木ほか（1985）の作成した受容、子供中心主義、統制、敵意の含まれた統制、一貫性のないしつけの5尺度からそれぞれ5項目ずつ、小嶋ほか（1988）の作成した実権に関する尺度から5項目、合計30項目を

用いた(表5)。そして、5段階評定(4. たしかにそうだ、3. まあそうだ、2. どちらともいえない、1. あまりそうでない、0. まったくそうでない) からの質問紙を作成した。

結果

1. 尺度の因子分析

それぞれの尺度について、信頼性を確認するために因子分析を行った。その手順は、まず主成分分析を行い固有値の変動に注目して因子数を決定し、次に主因子法による因子分析を行い、最終的にプロマックス回転を行った。

まず、担任評定による子どもの行動に関する項目の因子分析の結果、2つの因子が得られ、それぞれに高く負荷する項目内容から、向社会性因子と攻撃因子と命名した。そして各因子に高く負荷する項目を用いて尺度を構成した(表2)。

次に、子どもの行動に関する父親と母親の評定データを一緒にして因子分析を行った。その結果、2因子が得られた。それぞれの因子に高く負荷する項目の内容は、担任が評定した因子と対応しており、向社会性

表2 園での子どもの行動尺度と項目

向社会性尺度の項目 (α 係数 : 0.871)
1. 友達を励ましたり応援したりする
2. 友達が悲しんでいたるとき、なぐさめる
3. 友達が困っていたら助ける
4. 友達の世話をする
5. 年下の子の面倒をみる
6. 植物の世話をする
7. 生き物をかわいがる
攻撃尺度の項目 (α 係数 : 0.856)
1. すぐに暴力をふるう
2. 友達をつねったり叩いたりする
3. 友達とけんかをする
4. 物を乱暴に扱う
5. いうことを聞かない
6. 言葉づかいがあらう
7. 自分より小さい子どもをいじめる

表3 家庭での子どもの行動尺度と項目

向社会性尺度の項目 (α 係数 : 0.790)
1. 元気がない子がいると声をかけたり励ましたりする。
2. 友だちが怪我をしたり病気のとき手当てをする。
3. 友達がいじめられているとしたらかばう。
4. 家族の誰かが困っているとき助ける。
5. 年下の子どもをかわいがる。
6. 周りの人に元気に挨拶したり、話しかけたりする。
7. 誰かからもらったものを友達にわけてやる。
8. 家族のお祝いの日や誕生日にプレゼントをする。
9. 生き物をよくかわいがる。
10. 混んでいる電車やバスで立っている人に席を譲る。
11. お手伝いをよくする。

攻撃尺度 (α 係数 : 0.866)

1. すぐ暴力をふるう。
2. 物を乱暴に扱う。
3. 怒られるとすぐにかつとなる。
4. 友達をつねったり叩いたりする。
5. つまらない、ささいなことでイライラする。
6. 気に入らないことがあると暴れる。
7. 言う事を聞かない。
8. 言葉づかいが荒い。
9. たたかれたらすぐにやりかえす。
10. 友達とよくけんかをする。
11. 小さい子をいじめる。

因子と攻撃因子と命名し尺度を構成した(表3)。

父親と母親自身の行動に関する項目についても、父親と母親のデータを一緒にして因子分析を行った。その結果、向社会性因子と攻撃因子が得られ、尺度を構成した(表4)。

表4 親の行動尺度と項目

向社会性尺度の項目 (α 係数 : 0.788)
1. 友達・家族の悩みを聞いたり、相談相手になる。19
2. 他人の失敗を笑ったりしないで励ましてあげる。
3. 家族のものが具合の悪いとき、看病する。12
4. 列に並んでいて急ぐ人のために順番をゆずる。
5. 家の掃除や片付けをする。
6. 祝いの日や誕生日にプレゼントをする。
7. 周りの人に元気に挨拶したり、話しかけたりする。
8. 何か探している人にはこちらから声をかける。
9. 歳末助け合いなどの募金に寄付する。
10. バスや電車で立っている人に席を譲る。
攻撃尺度の項目 (α 係数 : 0.797)
1. 腹の立つ相手には、いやみとか皮肉を言ってやりたいと思う。
2. 腹の立つことをされると、にらみつけてやりたくなる。
3. 特定の誰かが気に入らなくて、反抗的な態度を取ることがある。
4. 腹の立つことをされると、後々まで根に持つ方である。
5. 批判や忠告をされると、内心恨んでしまう。
6. 自分と考えの合わない人のことを、心から受け入れることはできない。
7. すぐに相手の言葉尻をとらえて、つかかかってやりたくなる。
8. めちゃくちゃな行動をしたくなる時がある。
9. 物事がうまくいかないとイライラして、すぐ人にあたる。
10. 無我夢中で乱暴な運転(車、バイク、自転車)をしたいと思うことがある。

表5 親の養育態度尺度の項目

受容的態度（ α 係数：0.780）	
1. うちで子どもと楽しい時間を過ごす	
2. 子どもが喜びそうなことを、いつも考えている。	
3. 子どもにたびたび話しかける	
4. 子どものことにじゅうぶん気を配っている。	
5. 子どもと一緒に、外出や旅行をするのが好きだ。	
6. 自分にとって、子どもが何よりも大切だ。	
7. 自分のことは我慢しても、子どものためにしてやる ことがよくある。	
8. 子どもが怖がっているときには安心させてやる。	
統制的態度（ α 係数：0.769）	
1. 子どもに対しては、決まりをたくさん作り、それを やかましく言わなければいけないと思う。	
2. 子どもの行儀をよくするために罰を与えるのは、正 しいことだと思う。	
3. 子どもを、自分の言いつけどおりに従わせている。	
4. 子どものした悪いことは、みな、何かの形で罰を与 えるべきだと思う。	
5. 子どもには、できるだけ私の考えどおりにさせたい。	
6. 子どもがすべきことをちゃんとしてしまうまで何回 でも指示する。	
7. 子どもに、何事もどんなふうにしたらよいかを、こ とこまかに言い聞かせる。	
8. 子どもが言いつけどおりにするまで子どもを責めた てる。	

親の養育態度についても父親と母親のデータを一緒にして因子分析を行い4因子を得た。その因子の内容は、子どもに対する受容、統制、態度の矛盾、養育における主導権に関するもので、それぞれ受容因子、統制因子、矛盾因子、実権因子と命名し尺度を構成した。その内、受容的態度と統制的態度の項目を表5に示す。

各尺度に関する信頼性を確認するために α 係数を算出した。各 α 係数をそれぞれの表に示す。いずれの尺度も高い信頼性を示していたので、各尺度項目の評定得点の和を求め、それぞれの尺度得点とした。

2. 子どもに関する行動評定の一致

子どもの向社会的行動と攻撃行動について、担任評定、父親評定、母親評定の三者間の一致程度を調べるために、男女別に相関係数を算出した（表6、7）。

男児では向社会的行動について、父親評定と母親評定は互いに高い有意な相関があったが、担任評定との間にはぜんぜん相関がなかった。それに対して女兒の結果は、父親評定と母親評定の間には男児と同じような有意な相関があり、かつそれぞれは担任評定との間にも低い有意な相関がみられた。

攻撃行動についても上と同じような結果であった。

向社会的行動と攻撃行動との関連は、男女児共に同一評定者では低い負の相関があった。

表6 子どもの向社会的行動評定間の相関係数

	担任評定	父親評定	母親評定
担任評定		315*	224*
父親評定	-016		546**
母親評定	038	511**	

（左下は男児、右上は女兒の結果；小数点省略）

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

表7 子どもの攻撃行動評定間の相関係数

	担任評定	父親評定	母親評定
担任評定		250*	318**
父親評定	073		540**
母親評定	168	508**	

（左下は男児、右上は女兒の結果）

3. 養育態度間の関連と親子間の類似性

まず、受容的態度と統制的態度について、その関連をみるために相関係数を算出した（表8）。その結果、男女でほとんど同じような関連パターンを示していた。父親母親それぞれにおける受容と統制の間には相関がなかった。父親と母親の態度間の関連をみると、父親の受容は母親の受容と低い有意な正の相関があり、また同じく父親の統制は母親の統制と低い有意な正の相関があった。父親の受容と母親の統制との間に一部負の相関がみられたが、低い値であった。

全体としては、同じ態度次元については父親母親の間で低い一致がみられた。また、受容と統制の間には相関はみられず、両者は独立した態度だと考えられる。

表8 親の養育態度間の相関

	父受容	父統制	母受容	母統制
父受容		-096	203*	-157
父統制	-002		045	246**
母受容	299**	028		-048
母統制	-213*	236**	-068	

（左下：男児、右上；女兒）

次に、父親および母親の特徴と子どもの特徴との類似性を調べるために、向社会性得点と攻撃得点についてそれぞれ親子間の相関係数を求めた（表9）。その結果、向社会的行動について、男女児共に父親母親の向社会的行動得点（向社会性得点）とそれぞれ父親母親が評定した子どもの向社会性得点との間に有意な正の相関があった。そして男女共に母親の得点と父親が評定した子どもの得点との間にも有意な相関があった。さらに女兒については、父親の得点と母親が評定した子どもの得点との間にも有意な相関があった。しかし、担任が評定した子どもの得点と父親母親自身の得点との間には男女児共に有意な相関はなかった。

表 9 親子間の類似性

類似性 性別		父子間の相関		母子間の相関	
		男児	女児	男児	女児
向 社 会	子 (担任評定)	-105	142	-112	116
	子 (父評定)	280*	389**	311**	268**
	子 (母評定)	012	232*	443**	408**
攻 撃	子 (担任評定)	022	079	-127	155
	子 (父評定)	245**	224*	081	120
	子 (母評定)	077	097	198*	149

以上、向社会的行動について、父親母親自身の特徴とその親が評定した子どもの特徴との間には類似性がみられるということであった。さらに、父親母親の特徴はそれぞれ母親父親という他方の親の評定した子どもの特徴とも類似していた。したがって、親子間の類似性は、同一評定者による一致だけでなく異なった評定者間の一致をも示していることが明らかとなった。

攻撃行動については、男児では父親母親の攻撃得点とそれぞれ父親母親が評定した子どもの攻撃得点との間には低い有意な相関があった。女児については、父親の得点と父親が評定した子どもの得点との間にのみ低い有意な相関があった。先の結果と同じように、担任が評定した子どもの得点と父親母親の得点の間には男女ともに有意な相関はなかった。

したがって、攻撃行動の場合は、男児では父親母親自身の特徴とその親が評定した子どもの特徴との間にはゆるい類似性がみられた。女子については父親と子どもの特徴がゆるやかに類似していたが、母親と子どもとの間には類似性はなかった。

また、向社会的行動と攻撃行動について、園での子どもの特徴と親自身の特徴との間には類似性はみられないということが明らかとなった。

4. 親子関係の特徴と親子間の類似性

仮説を検証するために、親子関係の特徴ごとに親子間の相関係数を求め、向社会的行動のモデリングや攻撃行動のモデリングが親子関係の特徴によってどのように異なるかについて検討した。そのために、まず養育態度の各尺度得点について子どもを約1/3ずつ高中低(H、M、L)群に分け、次にH群とL群それぞれにおいて親の得点と子ども得点との相関係数を求めた。

本研究の分析では、仮説との関連で、親子関係を受容的態度因子と統制的態度因子の二つに絞った。そして、H群やL群の両方で相関が有意なものは除外して、H群とL群のいずれかで高い相関を示し、他方では低い相関を示す点に焦点を当てた。

(1) 受容的態度と向社会的行動の類似性(表10, 11)

父親の受容的態度について、男児では受容H群にお

いて母親の向社会性得点と父親評定による子どもの向社会性得点との間にかなり高い正の相関がみられたが、L群ではみられなかった。女児について、受容H群では父親の得点と子どもの得点(父親評定と母親評定の両方)との間に高い相関があったのに対して、L群では相関がなかった。また、受容H群では母親の得点と父親評定による子どもの得点との間にも有意な正の相関がみられたが、L群ではみられなかった。

このように、父親の受容H群において、父親と女児の向社会的行動の特徴が類似していた。つまり、父親が受容的な場合、父親の向社会的行動が多ければ多いほど女児の向社会的行動が多いという結果であった(図2)。ここで母親評定による子どもの特徴と父親評定による父親の特徴が類似していた点も注目される。したがって、父親が受容的な場合に女児は父親の向社会的行動をモデルとしている可能性があることが示唆される。これは仮説1を支持する結果であった。一般に養育態度にかかわらず母親と子どもの間の相関は高かったが、特に父親が受容的な場合には、父親の目から見ても子どもの向社会的行動の特徴は母親の特徴と類似していた。したがって、父親が受容的な場合は、子どもに母親への向社会的行動のモデリングが生じている可能性が高い。

表 10 父親の受容的態度と向社会性の類似性

父親の受容	父子間の相関		母子間の相関	
	H	L	H	L
男 (担任評定)	-183	037	-039	-183
男 (父評定)	244	183	529**	201
男 (母評定)	-091	262	356*	557**
女 (担任評定)	221	-052	105	113
女 (父評定)	588**	029	358*	188
女 (母評定)	421**	014	417**	365*

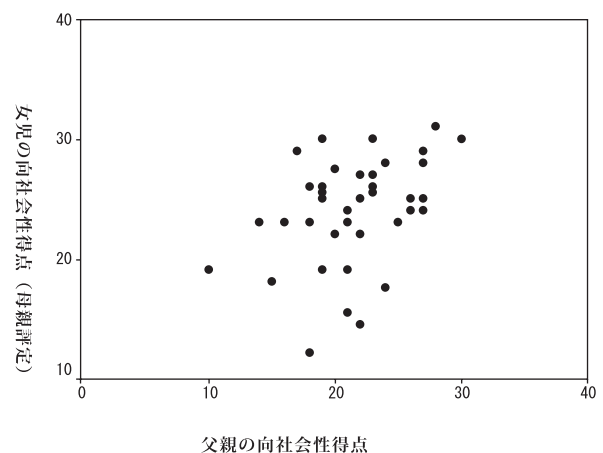


図2 父親受容H群の向社会性散佈図(父-女児)

母親の受容的態度について、男児では受容L群において、母親の特徴と子どもの特徴の相関が高かったのに対して、H群では相関がみられなかった。また女兒についても同じように、受容L群において母親の特徴と子どもの特徴との相関が高かったのに対して、H群では相関がみられなかった。

したがって、母親については受容が低い（拒否的）場合において、男女児に共通して、母親の向社会的行動へのモデリングが生じている可能性があった。

表 11 母親の受容的態度と向社会性の類似性

母親の受容	父子間の相関		母子間の相関	
	H	L	H	L
男（担任評定）	056	-189	116	-262
男（父評定）	311*	245	301*	287
男（母評定）	-082	-037	-003	530**
女（担任評定）	184	202	052	241
女（父評定）	383*	398*	171	286
女（母評定）	324	105	156	334*

（2）受容的態度と攻撃行動の類似性（表 12, 13）

父親の受容的態度について、男児の受容L群において父親の攻撃得点と子どもの攻撃得点、母親の攻撃得点と子どもの攻撃得点との間に有意な相関があったが、H群ではなかった。また、男児では受容H群において母親の得点と父親評定による子どもの得点との間に有意な相関があったが、L群にはなかった。女兒についても、受容L群において父親の得点と子どもの得点、母親の得点と子どもの得点（父親評定）との間に有意な相関があったが、H群ではみられなかった。

母親の受容的態度に関して、男児については特筆すべき結果は得られなかった。女兒について母親の受容H群において父親と女兒の間に有意な相関があった。

以上、男女児に共通して、父親の受容が低い（拒否的）場合、父親と子どもの攻撃行動の特徴（図 3）が類似していた。したがって、父親が拒否的な場合には攻撃行動について父親へのモデリングが生じている可能性がある。これは仮説 2 を支持する結果であった。

表 12 父親の受容的態度と攻撃行動の類似性

父親の受容	父子間の相関		母子間の相関	
	H	L	H	L
男（担任評定）	-136	158	-102	-094
男（父評定）	130	306*	347*	014
男（母評定）	181	020	183	375*
女（担任評定）	021	034	265	174
女（父評定）	046	389*	-076	414*
女（母評定）	022	060	046	049

表 13 母親の受容的態度と攻撃行動の類似性

母親の受容	父子間の相関		母子間の相関	
	H	L	H	L
男（担任評定）	-156	146	-224	052
男（父評定）	169	282	-097	166
男（母評定）	107	-039	-077	245
女（担任評定）	-265	-001	168	088
女（父評定）	350*	246	-062	-002
女（母評定）	123	077	-123	090

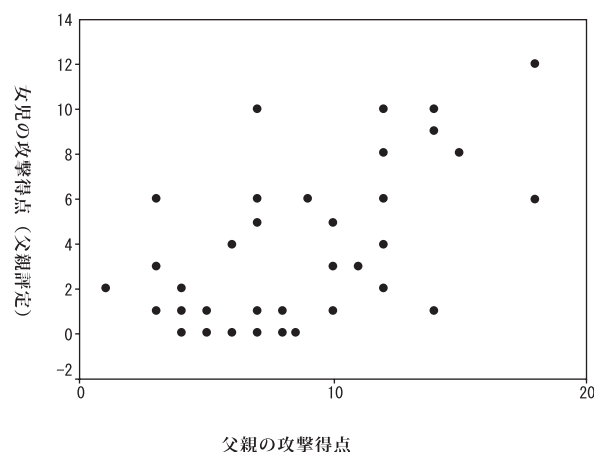


図 3 父親受容L群の攻撃得点散布図（父－女兒）

他方、父親が受容的な場合に男児は母親と攻撃行動の特徴が類似していた。また、母親が受容的な場合には女兒は父親と攻撃行動の特徴がやや類似していた。これらのことを総合すると、子どもの攻撃行動は、父親が受容的な場合に男児は母親を、母親が受容的な場合に女兒は父親をモデルとしている可能性がある。

（3）統制的態度と向社会的行動の類似性（表 14, 15）

父親の統制H群において、男児では母親の向社会性得点と子どもの向社会性得点との間に高い正の相関があったが、L群ではそれほど高い相関でなかった。女兒についても同じような傾向がみられた。

表 14 父親の統制的態度と向社会性の類似性

父親の統制	父子間の相関		母子間の相関	
	H	L	H	L
男（担任評定）	046	-266	-096	-095
男（父評定）	356*	271	317*	211
男（母評定）	105	-095	518**	264
女（担任評定）	199	197	277	-038
女（父評定）	458**	337*	349*	243
女（母評定）	159	174	514**	256

母親の統制的態度について、男児では統制L群において、母親の特徴と父親評定による子どもの特徴との間に正の相関がみられたが、H群ではみられなかった。女兒については、特筆すべき結果はみられなかった。

表 15 母親の統制的態度と向社会的性の類似性

母親の統制	父子間の相関		母子間の相関	
	H	L	H	L
男（担任評定）	-201	-034	121	-010
男（父評定）	209	290*	012	401**
男（母評定）	-003	048	426**	383**
女（担任評定）	308	136	042	078
女（父評定）	338	348*	383*	277
女（母評定）	275	158	330	453**

以上、父親の統制が強い場合、男女に共通して母親の向社会的行動の特徴と子どもの特徴は類似していた。つまり、母親へのモデリングが生じている可能性がある。また、母親の統制がゆるい場合、男児は母親の向社会的行動の特徴と類似しており、母親へのモデリングが生じている可能性があった。

（4）統制的態度と攻撃行動の類似性（表 16, 17）

父親の統制的態度について、統制H群において、母親の攻撃得点と男児の攻撃得点との間に正の相関があったが、L群ではなかった。女兒では、父親の統制L群において母親の攻撃得点と母親評定による子どもの得点との間に有意な正の相関がみられたが、H群ではみられなかった。さらに注目すべきことに、父親統制L群では母親の攻撃得点と園での女兒の攻撃得点との間にかなり高い有意な相関があった。

母親の統制的態度について、男児は統制H群において父親の攻撃得点と子どもの攻撃得点との間に有意な正の相関がみられたが、L群ではみられなかった。女兒ではそのようなH群での相関は担任評定でみられたが、母親評定では反対にL群でみられた。

表 16 父親の統制的態度と攻撃行動の類似性

父親の統制	父子間の相関		母子間の相関	
	H	L	H	L
男（担任評定）	-197	089	-182	-245
男（父評定）	128	224	260	-076
男（母評定）	153	-134	389*	011
女（担任評定）	164	091	069	486**
女（父評定）	228	313	043	129
女（母評定）	-022	115	-155	345*

表 17 母親の統制的態度と攻撃行動の類似性

母親の統制	父子間の相関		母子間の相関	
	H	L	H	L
男（担任評定）	190	-169	-041	-085
男（父評定）	323*	117	089	187
男（母評定）	-010	162	312	130
女（担任評定）	451**	106	301	-145
女（父評定）	-079	373*	286	082
女（母評定）	-088	-001	133	106

以上、攻撃行動について、父親母親の統制的態度によるその親と子どもとの類似性はみられなかったが、他方の親との類似性がみられた。ただし、その関連は男女で異なっていた。男児では父親の統制が強い場合に母親との類似性がみられ、女兒では父親の統制がゆるやかな場合に母親との類似性がみられた。ここでは男女によって異なったモデリングが生じている可能性がある。

5. 親子関係と親子の特徴

（1）受容的態度と向社会的行動

親子の間に類似性がみられる場合、どのような方向への類似性なのかを明らかにするために、養育態度の特徴によって親子の特徴がどのように異なるかについて検討した。そのために、養育態度の各尺度得点について高中低（H、M、L）群ごとに、男女別にそれぞれ子どもと親自身の向社会的性得点および攻撃得点の平均値を算出し、一要因の分散分析を行った。有意差のあったものについては群間の比較を行い、H群とL群の間に有意差のあったものに焦点を当てた。

その結果、まず父親の受容的態度に関して、男女児に共通して父親評定による子どもの向社会的行動と父親自身の向社会的行動についてそれぞれ有意差があった。すなわち、いずれも受容H群の方がL群よりも有意に得点が高かった（図4）。

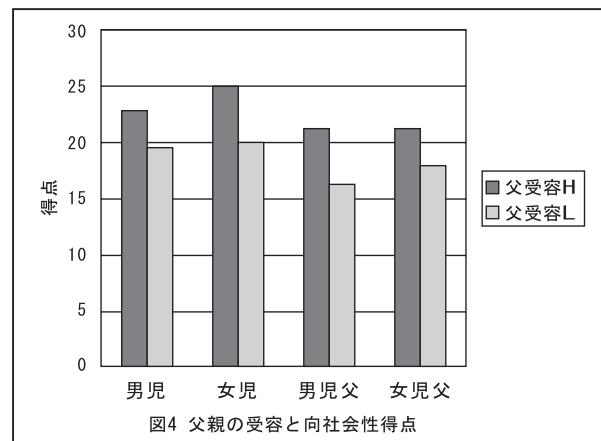


図4 父親の受容と向社会的性得点

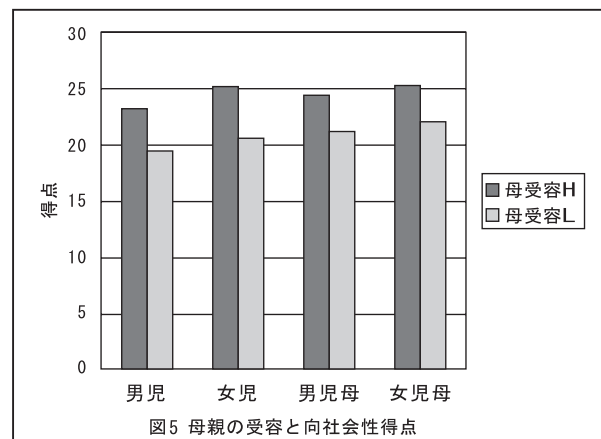


図5 母親の受容と向社会的性得点

母親の受容的態度に関して、男女に共通して母親評定による子どもと母親自身の向社会的行動について有意差があり、いずれもH群の方がL群よりも得点が高かった（図5）。さらに父親評定による男児の向社会的行動に有意差があり、ここでも受容H群の方がL群よりも得点が高かった。

したがって、父親あるいは母親が受容的な場合、親自身の向社会性得点が高く、子どもの向社会性得点も高いということが明らかとなった。

（2）受容的態度と攻撃行動

父親の受容的態度に関して、男女児共に父親評定による攻撃得点に有意差があり、受容L群の方がH群よりも攻撃得点が高かった（図6）。

母親の受容的態度に関して、男児はL群の方がH群よりも母親評定による攻撃得点が高く、また母親自身の得点も有意に高かった（図7）。さらに母親の受容L群においては、男児は父親評定による攻撃得点が高く、父親自身の攻撃得点も有意に高かった。女兒についても、受容L群の方がH群よりも母親評定および父親評定による攻撃得点に有意に高かった。さらに、母親自身の得点も受容L群の方がH群よりも有意に高かった（図7）。

したがって、父親母親の態度が受容的でない場合、

子どもは男児も女児も共通して攻撃得点が高いといえる。また、子どもに対して受容的でない母親自身も攻撃得点が高かった。さらに、母親が男児に対して受容的でない場合は、父親自身の攻撃得点が高かった。

（3）統制的態度と向社会的行動

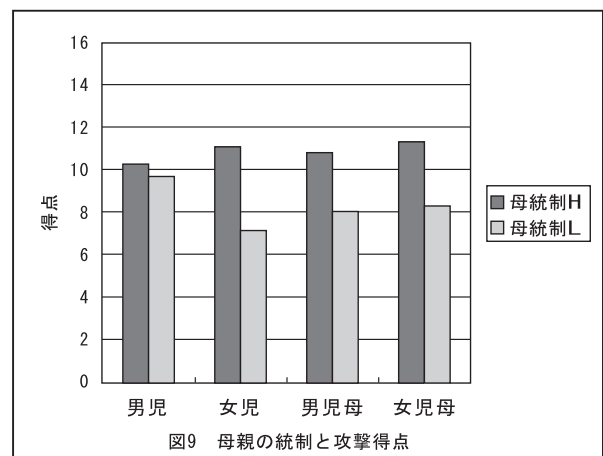
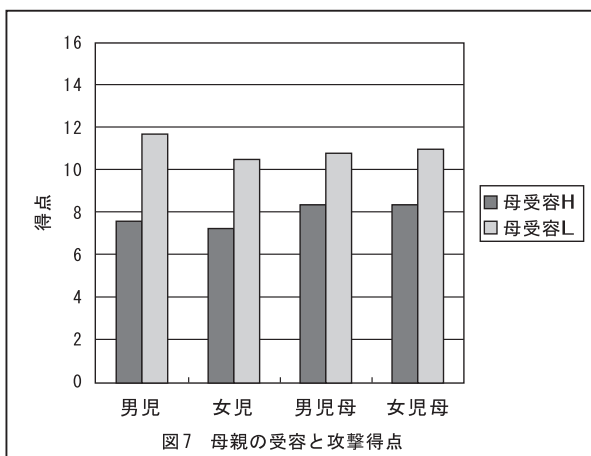
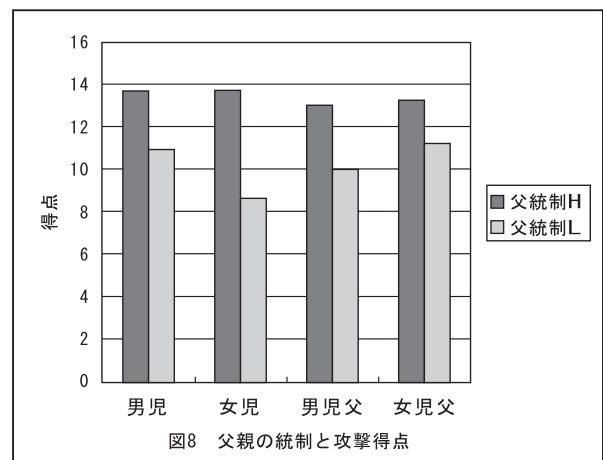
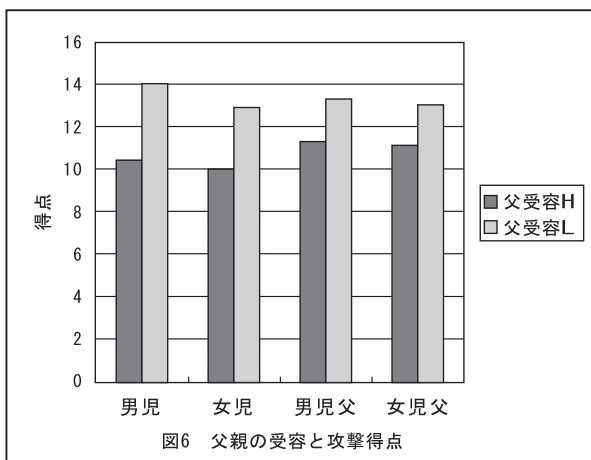
統制的態度については、父親母親および男女児の向社会的行動に関して有意差が一切認められなかった。

（4）統制的態度と攻撃行動

父親の統制的態度について、男児に関するH群はL群よりも父親自身の攻撃得点に有意に高く、男児自身の攻撃得点も高いという傾向があった。また、女兒に関する統制H群はL群よりも父親母親評定による女兒の攻撃得点に有意に高かったが、親自身の攻撃得点には有意差がなかった（図8）。

母親の統制的態度について、男児に関するH群の方がL群よりも母親の攻撃得点が高かったが、男児には有意差はなかった。また、女兒に対する母親の統制H群の方がL群よりも、母親評定による女兒の攻撃得点と母親自身の攻撃得点に有意に高かった（図9）。さらにこのH群の父親は攻撃得点が高い傾向があった。

したがって、父親が統制的な場合は、男女児共に攻撃得点が高いということと、男児に対して統制的な父親は自分自身が攻撃得点が高いという特徴があった。



母親が女兒に対して統制的な場合は、女兒の攻撃得点が無意に高かった。また、母親が男児あるいは女兒に対して統制的な場合は母親自身の攻撃得点が高かった。さらに、母親が女兒に対して統制的な場合、その父親の攻撃得点も高かった。

考察

向社会的行動や攻撃行動について、親子間の類似性と親子それぞれの特徴を総合すると次のようにまとめることができる。

(1) 向社会的行動のモデリング

女兒に対する父親の態度が受容的な場合、父親と女兒の向社会的行動の特徴が類似していたが、受容が低い(拒否的)場合はそのような類似性はみられなかった。ここで注目すべきは、この父親との類似性は、父親の評定による女兒の特徴だけでなく母親評定による女兒の特徴との間にも示されたことであった。このように異なったデータソースでも同じような結果が得られたことは重要である。

また、父親が受容的な場合、父親自身の向社会的性得点が高くかつ女兒の向社会的性得点も高いという結果であった。以上のことから、受容的な父子関係のなかで、女兒は向社会的行動の豊かな父親へのモデリングが生じ、その結果、高い向社会的性を形成したと考えられる。これは仮説1を支持する結果であった。

しかし、母親の受容的態度に関しては拒否的な場合において、男女児は共通して母親の向社会的行動との類似性が高かった。また母親の受容が低い場合は、母親自身の向社会的性得点が低く、子どもの向社会的性得点も低かった。したがって、母親が拒否的な場合に、子どもは向社会的性の低い母親へのモデリングの結果、低い向社会的性を形成したと考えられる。向社会的行動が少ない方向へのモデリングは、ネガティブな自己の形成という意味では、攻撃行動モデリングのメカニズムと根底でつながっているかも知れない。

父親の統制が強い場合、男女に共通して母親の向社会的行動の特徴と子どもの特徴は類似していた。つまり、統制の強い父親のもとで子どもに母親の向社会的行動へのモデリングが生じている可能性がある。それに対して、母親の統制がゆるい場合に男児は母親と向社会的性の特徴が類似しており、母親へのモデリングが生じている可能性があった。ここでは統制的態度と向社会的行動の特徴との間には関連がなかった。

(2) 攻撃行動のモデリング

男女児に共通して、父親の受容が低い(拒否的)場合、父親と子どもの攻撃行動の特徴が類似していた。また、父親が拒否的な場合、男女共に攻撃得点が高く、父親も有意ではないがそのような特徴を示していた。したがって、父親が拒否的な場合に子どもは父親の攻撃行

動へのモデリングを通じて強い攻撃性を形成したのではないかと考えられる。これは仮説2を支持する結果であった。

また、父親母親が受容的な場合、他方の親の攻撃行動へのモデリングが子どもに生じている可能性があった。この場合、他方の親の特徴やその親子関係の特徴などについて詳細な分析が必要であるが、今後の課題としたい。

攻撃行動について、親の統制的態度とその親子間の類似性との間には有意な関連はなかったが、他方の親との類似性がみられた。つまり、父親の統制がゆるやかな場合、母親評定だけでなく担任が評定した女兒の攻撃行動の特徴は母親の特徴と類似していた。したがって、父親の統制がゆるやかな場合、女兒は母親の攻撃行動へのモデリングを園においても表現している可能性がある。その反対に、母親が統制的な場合、女兒は攻撃行動の多い父親へのモデリングを通じて、園で多くの攻撃行動を示している可能性がある。

表16, 17が示すように統制態度次元に関しては父親・母親の態度、男児・女兒のモデリングの間に複雑な関連がみられた。このような結果は、単純に父と子、母と子の関係とモデリングの問題にとどまらず、父子という三者関係とモデリングの関連を扱う必要性を提出している。これは今後の課題としたい。

(3) 類似性とモデリング

類似性はモデリングそのものではない。本研究において、親子間の類似性をもたらすプロセスのなかでモデリングが生じているのではないかと考察してきた。しかし、類似性をもたらす可能性のある要因はモデリングだけではない。このような点についてはすでにいろいろな面から検討してきた(森下、1996)。

その一つに同一評定者による反応セットの働きが考えられる。例えば、自分を向社会的だと評定する親は自分の子どもを向社会的だと評定するのではないかという可能性である。表9に示されているように向社会的行動についてはその可能性は父親母親の両方にみられた。全体を通じてこのような点に注意を払う必要があるだろう。

しかし、父親評定による子どもの特徴と母親評定による母親の特徴との間にも有意な相関があり、単に反応セットの反映だけでは説明できない。また、養育態度の違いによって親子間の相関の程度が異なる点を反応セットで説明できるか。さらに父親では受容の高い群で相関が高いのに対して母親では受容の低い群で相関が高いのをどのように説明するか。特に、父親が受容的な場合に、父親と女兒の向社会的行動の特徴が類似していたが、その際、父親が評定した子どもの特徴と母親が評定した子どもの特徴の両方が、それぞれ父親自身の特徴と類似していたのは反応セットでは説明できないだろう。

二つ目は養育態度が、子どもの特徴と親の特徴を媒介している可能性である。例えば、向社会性の豊かな親は子どもに対して受容的な傾向があり、受容的な態度のもとでは子どもは向社会的な特性を形成するという可能性である。あるいは、攻撃性の強い親は統制的な傾向があり、統制的な態度のもとでは子どもは攻撃的になるという可能性である。確かにこのような可能性は否定できない。この点は類似性のメジャーとしてなを用いるかに関連している。このような要因をできるだけコントロールするために、本研究では養育態度を3群（H、M、L群）に分類しその内部で親子間の相関係数を求め、さらにH群とL群の結果を比較した。例えば、受容の高い群のなかで親子間の類似性が高いのに対して、受容の低い群では関連がないというような結果に注目したのである。

（4）評定者間の一致

子どもの向社会的行動と攻撃行動について父親母親および幼稚園の担任教師に評定を求めた。その結果は、上記のように父親と母親との間にいくぶん評定の一致が見られたが、親と担任教師との間には一致がみられなかった。ほかの研究でも同じような結果が示されている（森下、2002）。この問題は単純に評定の一致不一致の問題として扱うのではなく、子どもが家庭と園で示す行動の違いとしても理解する必要があるだろう。園と家庭での行動が比較的一致している子どもとそうでない子どもについての分析は、すでに上記の研究で報告している。また、同じ家庭内においても父親と母親に示す子どもの行動は、親の特徴や親子関係の特徴によって異なっている場合があると考えられる（森下、2001）。

本研究において、子どもの特徴を誰の評定に基づいて検討すればよいのかという問題があった。研究結果の多くは父親と母親の特徴と関連の深いのはその親自身の評定による子どもの特徴であった。これは同じデータソースからくる反応セットを反映している可能性が含まれている。ただそれだけでなく他方の親の評定でも同じような結果が得られたものがあった。上述のように、また同じデータソースであっても、親の養育態度によって親子間の関連が異なるという点に注目することによって、その影響を考慮した。そして、今も類似性あるいはモデリングのメジャーやインデックスとしてより適切なものはないかと模索中である。

（* 庵田奈甫 和歌山大学教育学部53期生）
（調査にご協力くださいました幼稚園の園長先生をはじめ担任の先生方や保護者の方に深く感謝いたします。）

引用文献

- 安立奈歩 2001 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要、47、475-487.
- Bandura, A. 1977 Social Learning Theory. Prentice - Hall. Inc.
（原野広太郎監訳 1979 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎— 金子書房）
- Bandura, A. 1986 Social foundations of Thought and Action : A Social Cognitive Theory. New Jergy :Prentice- Hall
- 岩立京子 1995 幼児・児童における向社会的行動の動機付け 風間書房
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- 小嶋秀夫・内山知朗・宮川充司 1988 家族関係調査（F R I）手引き〈暫定版〉名古屋大学教育学部心理学教室
- 森下正康 1983 児童期の親子関係と対人行動特性の同一視 和歌山大学教育学部教育研究所報 6 27 - 39.
- 森下正康 1990 中学生の親子関係とパーソナリティの類似性認知 和歌山大学教育学部教育研究所報 14、19 - 31.
- 森下正康 1996 子どもの社会的行動の形成に関する研究 風間書房
- 森下正康 1998 幼児期の母子関係が子どもの思いやりにおよぼす影響 和歌山大学教育学部紀要（教育科学）、48、1 - 13. .
- 森下正康 2000 幼児期の自己制御機能の発達（1）—思いやり、攻撃性、親子関係との関連— 和歌山大学教育学部紀要（教育科学）、50、9 - 24.
- 森下正康 2001 幼児期の自己制御機能の発達（3）—父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与える— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要、11、87-100.
- 森下正康 2002 幼児期の自己制御機能の発達（5）—親子関係が家庭と園での子どもの態度パターンにおよぼす影響— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要、12、47 - 62.
- 鈴木眞雄・松田 惺・長田忠夫・植村勝彦 1985 子どものパーソナルティ発達に影響を及ぼす養育態度・家庭環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告、34、139 - 152.
- 横塚怜子 1988 向社会的行動尺度（中高生版）作成の試み 教育心理学研究、37、158 - 162.